

ぼんぼん時計

JSPS Bonn Office

独立行政法人 日本学術振興会 ボン研究連絡センター
四半期報告
(2005 年 4 月～6 月)

2005 年 7 月 5 日
樋口和憲

復活祭で春を迎えた後、ドイツでは 5 月にマイバウム (Mai Baum: 5 月の樹) という習慣があります。マイバウムには地域ごとにさまざまな習慣があるようですが、ボン周辺地域では好きな女性の家の前に男性が白樺の樹を置くのだそうです。白樺の樹に色とりどりの短冊のような飾りをたらし風に舞う様子が日本の鯉のぼりの吹流しに少し似ています。またドイツ南部の地域では大きなマイバウムを村同士で奪い合うお祭りがあるそうです。日本でもよく行われる運動会での棒倒し競技のようなイメージです。いずれにしても 5 月は春になり生命力が溢れ出る月で、マイバウムはそのシンボルとも言えます。

長かった冬が終わって、5 月、6 月と本当に季節が良くなりました。6 月 (Juni) はローマ神話の結婚の女神 Juno が起源となっているようですが、日本の梅雨の時期と正反対にこの季節に結婚すると幸せになると言われるのもわかるような気がします。

1. はじめに - もう一つのワールドカップ

来年ドイツで開催されるワールドカップに日本チームの出場が決まった。他に熱狂できるものがなくなってきたためか (?)、日本でもサッカー熱はヒートする一方のようだ。

さて、今年のもう一つのワールドカップはどうだろう。それは「ロボカップ」と呼ばれるロボットによるサッカーワールドカップである。ロボカップはロボット工学と人工知能の融合・発展のために自律移動ロボットによるサッカーを題材として日本の研究者らによって提唱され、第 1 回世界大会が 1997 年名古屋で開催されている。ロボカップは西暦 2050 年にサッカーの世界チャンピオン・チームに勝てる自律型ロボットチームを作るという目標を掲げている。

今年 4 月 8 日から 10 日に開催された欧州選手権の小型ロボットリーグで 4 連覇を遂げたのが、ベルリン自由大学 (FU) の「FU ファイターズ」である。「FU ファイターズ」の自動ロボットはベルリン自由大学情報科学研究所・人工頭脳研究チームが開発したものだ。決勝戦ではオーストリア・ウィーンの「ヴィエンナ・キューブ」を 10 対 0 と圧倒し、今年 7 月 13 日から 19 日に大阪で開催される第 9 回ロボカップの優勝候補と目されるが結果はどうなるだろうか。第 10 回ロボカップはワールドカップと同様に、来年ドイツ (6 月 13 日—19 日ブレーメン) で開催予定である。

サッカーの盛んな南米でワールドカップでの失策で敗退した国の選手の殺人事件が起きたことがかつてあったが、ロボットの失策でロボカップで敗退しても、(ロボットはスクラップ行きかもしれないが) それで殺人が起こることはないだろう。しかし、人間の代替として戦争兵器が相手国を攻撃する戦争はすでに世界各地で起きているし、日本人警備会社員がイラ

クで亡くなったような戦争請負業者的警備会社の傭兵がロボットに取って代わられる未来が来ないとも限らない。すでに警備ロボットは実現化している。

今年度（または来年度）のボン研究連絡センターの小規模セミナー（コロキウム）はロボティクスをテーマにする予定で検討している。意識とは何かすらまだ本当にはわかっていない人類が人工知能やロボティクスを単なる技術として扱うのは心もとない気もする。ロボティクス研究は何をめざすのか、どこへ行こうとするのかしっかりと見極めたいものである。

2. ドイツ連邦レベルでの学術動向

◎連邦と各州が研究助成プログラムについて合意

速報

参照：<http://www.bmbf.de/press/1505.php>
(連邦研究教育省ホームページ)

○6月23日、ベルリンでシュレーダー首相と各州首相が、ついに連邦政府が提案した研究助成プログラムに合意し、協定に調印した。昨年初頭から論議を開始し、昨年3月に大枠が合意された後、連邦制改革、教育・大学の管轄権限問題をめぐって、一時は頓挫したかと思われていたエリート大学構築・助成構想がついに合意に至ったものだ。合意の経緯、プログラムの詳細は調査中であるが、今回はその概要を速報としてご紹介したい。計画とはいえ、かなりの大型予算が予定されている。

今回の研究助成プログラム導入について、以下の(1)研究助成プログラムと(2)研究・イノベーション協定が同時に合意されている。

- (1) 「(大学のための) エクセレンス・イニシアチブ (Exzellenzinitiative)」、
- (2) 「(大型研究所のための) 研究とイノベーションのための協定 (Pakt für Forschung und Innovation) (イノベーション・イニシアチブ)」である。

これまでのエリート大学構築・助成構想を、(1)によって研究と教育両方に細分化した3つのプログラムの中で最も論争のあったエリート大学支援について「将来構想 (Zukunftskonzepten)」支援という妥協表現を追加変更し、また、(2)によって大学だけでなく、大型研究所の予算の継続的増額を可能とすることで、各州の総意を取り込み、パッケージ的合意を取り付けたものと思われる。この研究助成プログラムは2011年までに総額19億ユーロ（約2500億円）を拠出し、そのうち連邦政府が75パーセント、各州が25パーセントを担当する。

- (1) 「エクセレンス・イニシアチブ」は次の3つの柱から成る。

- ① 大学院支援 (Graduiertenschulen) : 40 の大学院を年間各 100 万ユーロ（約 1 億 3000 万円）支援
- ② エクセレンス・クラスター支援 (Exzellenzcluster) : 30 の研究ネットワークを年間各 650 万ユーロ（約 8 億 6000 万円）支援
- ③ 大学の先端研究将来構想支援 (Förderung von “Zukunftskonzepten zu universitärer Spitzenforschung”) : 10 の先端研究を行うエリート（成熟した）大学に年間各 2100 万ユーロ（約 28 億円）支援

- (2) 「研究とイノベーションのための協定 (イノベーション・イニシアチブ)」はヘルマン・フォン・ヘルムホルツ協会 (HGF)、マックスプランク協会 (MPG)、フラウ

ンホーファー協会(FhG)、ライプニッツ学術連合(WGL)及びドイツ研究協会(DFG)の 5 機関への予算を 2010 年まで毎年 1 億 5000 万ユーロ(約 200 億円)追加提供し、毎年最低 3 パーセントの増額を保証するものである。

◎ドイツの研究に十数億ユーロの援助

dpa, Nr. 25/2005, 20. Juni, 2005

○前述の 6 月 23 日協定調印に先立ち、6 月 20 日ドイツプレスに発表された記事をご紹介します、速報を補足したい。

財政問題を抱えているにもかかわらず、連邦と各州からドイツの研究は今後数年に渡り十数億ユーロの追加援助を期待できる。先端研究とエリート大学振興のための 19 億ユーロ計画の他、6 月 23 日の首相と大臣らの会合では更なる重要な企画について議決される。「研究のための協定」によって連邦と各州は 2010 年まで大きな研究機関の予算を毎年 3 %ずつアップすることを義務付けられる。

Bayern 州の科学大臣 Thomas Goppel 氏(CDU)が委員長を務めた教育計画と研究振興のための連邦・各州・委員会(BLK)はベルリンで 6 月 16 日に開かれた特別会議でエクセレンス・イニシアチブの新しい協定案文を全員一致で可決した。

Goppel 氏と連邦教育大臣 Edelgard Bulmahn 氏(SPD)は政府のトップらにこのイニシアチブの協定を 23 日に首相と大臣らがその日程で署名し決議するよう呼びかけた。連邦政府と CDU/CSU 支持州は既に 6 月 10 日に合意することに一致していた。

この十数億ユーロ援助によって大学での様々な分野で 30 もの先端研究機関が築き上げられ、さらに 40 もの大学院(Graduiertenkollegs)が若手研究者のために設立される。競争により選ばれた 10 の大学にはドイツの研究界の“燈台”的存在として国際的に名を成すようその他年間 1350 万ユーロが支払われる。この計画は 2006 年から 2011 年まで実行される。予算の 75%は連邦が、残りの 25%は支援される大学が在する州が負担する。

「この追加の研究費をめぐってドイツ中の大学が競争に殺到した」と Bulmahn 氏。

「この計画の実行が延びれば延びるほどその待機期間は大学にとって無駄に過ぎる時間なのです。」このエクセレンス競争によって「私達はドイツの最も優秀な大学が国際的競争力を増すための手伝いをしているのです。今これらの大学には国際的なエリートグループにまでのし上がるチャンスを手にしたのです。」

「勿論もっと早くに結果が出ていれば更に好ましかったでしょうが、この計画は始めから 2006 年後半からスタートする方向で進んでいました」と、Goppel 氏。連邦の政権交代がもし起こった場合、新しい政党による予算削減によってこの企画が危うくなる可能性については、という質問に対しては「誰も信用に値しない人物・政党と言うレッテルを貼られたいとは思わないでしょう」と、答えた。

この計画は 2004 年、連邦によって各州に提案された。しかし連邦制度改革論争によって暗影を投げかけられ、例の無い交渉競争が呼び起こされた。何度も署名を待つだけの合意書が完成され、CDU/CSU 大臣らの拒否によって何ヶ月にも渡って凍結された。それに対してドイツの研究機関は猛反対をしたのだった。

新しい大学院は国内・国外からの若手研究者を受け入れる。先端研究センター(クラスター)によって外国人エリート研究者にも国際的に認められるドイツ科学の得意分野

を形成する。この新しい大学院の設置や先端研究センターをめぐる競争でよい成績を出した 10 の大学は追加振興予算を受け取ってエリート大学として活躍する。

「教育と科学の組合（GEW）」は大学と研究のための総合的な戦略を求めた。GEW-幹部の Gerd Koehler 氏はこのイニシアチブではまったく十分ではない、と語った。今後今まで以上の学生数が予想されるのにもかかわらず大学状況の改善が行われないのだ、と。更に、新しくできる 30 の特別研究分野によって「構造的に考えの甘い大学、研究機構、企業の共同活動が深まる訳ではない。」

連邦－各州エクセレンス・イニシアチブの 3 本の柱

【柱 1】：年間合計 4 千万ユーロで若手研究者のための新しい 40 の大学院の設立。それらは国内・国外の大学院希望者を集めるほど魅力的であるべき。若手研究者はそこで最高のサポートを受けながら早い段階から自主的に研究する。連邦と各州は既に現在 304 の大学院を支援している。

【柱 2】：様々な分野の国際的に評価された先端研究センター（Cluster）を 30 設立。約 1 億 9 千 500 万ユーロの予算は競争によって振り分けられる。連邦と各州は既に現在ドイツ研究協会（DFG）を通して大学での 272 の特別研究分野を支援している。

【柱 3】：ドイツの研究構造における新たな支援：大学院（柱 1）と先端研究センター（柱 2）設立で最も成功を示している 10 ほどの大学に年間 1350 万ユーロの追加予算が振り分けられる。

例えばこれによって学科を超えた共同プロジェクトが一大学外の研究機関との共同作業も含めて一振興される。目標は妥協表現として協定案文に書かれた「先端研究の充実のための“将来構想（Zukunftskonzepten）”」の発展。競争によって国際的にも注目を集める“燈台”がドイツの大学風景にそそり立つことを目指す。資金分配については国際的な審査委員会が決定する。

◎ドイツの大学アメリカ人を募集：優れた頭脳を求む

dpa, Nr.18/2005, 2. Mai, 2005

○ドイツの大学はこれまで博士号取得年齢が 31 歳前後、大学教授資格（ハビリタチオン）取得が 40 歳前後で、独立した研究を行うことができる教授職着任までの道のりは非常に長く、優秀な若者がその道のりを敬遠し、アメリカや産業界に流れていくこと、特にアメリカへの頭脳流出が問題視されてきた。それと同時に欧州では国際的に優れた頭脳がアメリカに一極化集中していることも懸念されている。例えば、フンボルト財団がブラウンホーファー協会と協力して Fraunhofer—Bessel Research Award を新設し、優れたアメリカの若手研究者を招へいしようという動きもあるように、ドイツの大学でもアメリカから優れた頭脳を呼び寄せようという動きが見られるので紹介する。ここで紹介するように、ドイツではコンソーシアム的な大学間連携、協力がさかんになってきている。日本では大学の国際化などに向けた大学間連携はどの程度取り組まれているのだろうか。そして、そのために学振海外研究連絡センターは何ができるのだろうか。

ドイツの大学は世界中から学術的才能を募集している。ミュンヘン－ブレーメン間の 35 の大学を代表する七つのコンソーシアムが今までにない形でアメリカからの研究者、講師や学生を募っている。「世界のトップ頭脳の何人かをドイツに欲しいと思っている。」と、DAAD（ドイツ学術交流会）在米センターのセンター長 Ulrich Grothus 氏はドイツプレス（dpa: Deutsche Presse-Agentur GmbH）に語った。

例えば、在モスクワの Berlin-Humboldt 大学連絡事務所のように、過去にもいくつかの大学による似たような試みがあった。今回新しいのは 3 ダースにもおよぶドイツの大学がアメリカで、— ニューヨークの国連本部の斜め向かいにある DAAD の傘下のドイツ・ハウス (Deutsches Haus) で— 共同して取り組むことだ。そこからアメリカの大学との交流を深め、ドイツへの研究協力の依頼を受け、そして優れたアメリカの科学者達を募集する。

「国際的な競争力を保つためにはもっと積極的に行動し、将来的に教育関係にもっとお金をかけなければいけない」と、Freie Universitaet Berlin 大学 (FU) の Dieter Lenzen 学長はニューヨークの新しい連絡センターの設立祝賀会で述べた。それには特に自然科学やエンジニアリング科学の分野で、(ドイツの大学で) 英語での講義を増やすことも含まれる。

「ドイツでの流動性を振興すれば、ドイツの学生にとっても海外留学がしやすくなる」と、ミュンヘン Ludwig-Maximilians 大学 (LMU) の Bernd Huber 学長。FU と LMU はすでに 2004 年に戦略的なパートナーシップを約束しあい、今回さらにニューヨークに共同の連絡センターを設立した。

アメリカ人にとってドイツの大学に来ることは数多くのメリットがある。何よりも経済的な利点は大きい。アメリカの Havard, Yale や Princeton などのアイビーリーグ・エリート大学でのバチェラー取得までの 4 年間は 15 万 \$ (11.6 万ユーロ : 約 1500 万円) ものコストがかかるのに対し、ドイツでの大学教育はアメリカからの若者にとってほぼ無料である。ボローニャ宣言によるドイツでのマスターやバチェラー制への変更によって、今後ドイツ留学中に取得したクレジット・ポイントを帰国後アメリカで問題なく換算することが可能になる。

大学の国際化によって才能の流出を防ぎ、できるだけ多くのアメリカ滞在中のドイツ人博士号取得志望者をドイツに呼び戻すことも目指す。一方、ドイツ留学中のアメリカ人学生数を DAAD は 5,500 名ほどと数える。アメリカ人はポーランド人に次いでドイツの大学への外国人留学生の最も高い割合を占めている。(注※)

現在ドイツの大学の 10 人中 1 人は外国国籍を持っている。専門家によると、ドイツが国際的な競争力を持った大学国であると主張出来るためには少なくとも 20 から 25% までの大学での占有率を他国からの「トップ頭脳」達に用意しなければならないという。

注※ : 本掲載記事によると、アメリカからドイツへの留学生がポーランドに次いで 2 番目となっていたが、実際には (確かにアメリカからの留学生は年々増えてはいるようだが)、2004 年統計では、1 位 : 中国 (25284 人)、2 位 : トルコ (24448 人)、3 位 : ポーランド (14350 人)、4 位 : ブルガリア (12048 人)、5 位 : ロシア (10814 人)、6 位 : モロッコ (8097 人)、7 位 : ウクライナ (7238 人)、8 位 : イタリア (7183 人)、9 位 : ギリシャ (7043 人)、10 位 : フランス (6431 人) とアメリカは 10 位内にも入ってこないで、明らかな誤りであると思われる。(この 2004 年統計ではアメリカは 3324 人) 留学生数に関する参照統計は、<http://www.wissenschaft-welttoffen.de> による。

◎ヘッセン州の大学が大学間同盟を計画

dpa, Nr.21/2005, 23. Mai, 2005

○日本でも 6 月 24 日、信州大学と東京理科大が生命科学とナノテクノロジー分野を中心に共同研究や人材交流などで包括協定を締結したという報道があったが、ドイツの大学でも国際化をめ

ざす大学間連携、協力の動き以外に、国際的競争力を高め海外からも魅力的な大学と映るよう、大学間連携、協力をめざす動きもある。これに関連し、ヘッセン州の動向をご紹介します。

ヘッセン州の大学は大学間同盟によって将来性や国際的競争力を高めることを期待している。Darmstadt 大学と Frankfurt 大学は契約を交わし、お互いの戦略の示し合わせを義務づけた。ヘッセン州中部では 2 大学と 1 専門大学が三者協定を結び、また Kassel 大学も州境を超えて Goettingen 大学との協定を結んだ。協定の目的・内容は予算削減のためではないと科学大臣と大学学長らは主張した。CDU-州政府は縮小的な予算にかかわらず、大学や学校を優先的に振興していく意思を表明。Hessen 州はドイツ中で最も大学間の密度が高い地域であり、大学同士の交流や調節は国際的競争力にも有利であると Hessen 州科学大臣 Udo Corts 氏は語った。

Darmstadt 大学と Frankfurt 大学は、1999 年の条約によって大学間協力は既に定められていたが、今度の同盟はそれを超えた、ドイツでは前例のないものである。同盟の目標はお互いの目標をよりよく達成するための全体的なコンセプトを設立すること。一つ一つの学部改善の可能性について共に検討していく。共同の学部ができる可能性もある。

ヘッセン州最大の大学（-Frankfurt 大学）と、ドイツで唯一（教授任用権等の）自治権を持った大学（-Darmstadt 大学）は教授任用に関しても共同採決する予定。二重にだぶる授業提供を減らし、類似の科目では互いの重点をずらし、補充しあう分野では互いに調節を目指す。教育内容では共同授業を提供し、学生や教員は二つの大学を行き来することになる。さらにインターネットやビデオによる講義の放映についても検討されている。

Frankfurt 大学は Darmstadt 大学の情報技術科学分野の学科に、Darmstadt 大学は Frankfurt 大学の人文科学、社会科学、や経済科学分野の学科に期待している。

それぞれの大学の学生自治会（AStA）は同盟によって将来的にいくつかの授業内容が削減されることを危惧している。大学間の移動時間は 1.5 時間。学生の行き来を通常化するのには効率的ではないと考えるためだ。

同じく Hessen 州中部の Marburg 大学、Giessen 大学、Giessen-Friedberg 専門大学は共同の学習課程（職業学校教員訓練用など）などを提供する予定。教育の重点をお互いに調節し、授業の交換を目指し、さらには学術的な生涯（継続）教育や総合管理での協力も計画している。それらによって国際的に注目されることを期待している。

Kassel 大学と、そこから 50Km ほど離れたニーダーザクセン州の Goettingen 大学は共同の教授任命とお互いの授業の調節を計画。農学部から実行に移して、次には情報工学部が続く。学生や教員は大学間を行き来することになる。

大学によっては経済的な理由で十分なクオリティーを保てないという問題を抱えていることを認めているものの、同盟への第一の動機はあくまで予算的なものではないという。今現在の資金のままでより良いものを目指したい。これらの共同活動は学生、研究者、管理部、大学理事会、そして生涯（継続）教育すべてにとって利益をもたらす。共有する問題をそれぞれが毎回別々に解決することに意味はないのだから。

◎バACHEラーとマスター課程の人気高まる

dpa, Nr.17/2005, 25. April, 2005

○1999 年、欧州 40 カ国が調印したボローニャ宣言は、欧州に「統一の高等教育空間」を創ることを宣言した。ご承知のように、それは欧州内の大学における卒業学位のシステムを統一し、欧州の大学で取得できる学位の国際的評価を高めようとするものである。現在、ドイツを含む欧州各国で、このボローニャ宣言に基づき、欧州共通の学位取得制度の確立を目指し改革が進行している。改革の主眼は、大学教育を「バACHEラー課程」と「マスター課程」の二段階システムに変更するという点にあるが、2005 年までに、欧州各国は自国の大学全てに学位の二段階システム導入の準備を行い、ドイツでも 2010 年末までには全大学で欧州共通の学位の二段階システムに移行する予定である。さて、しかしその進行具合はどうかというと、16 の各州さまざまであり、大学によってもさまざまである。ドイツの工業技術力をささえてきた工科大学の学部、あるいは心理学など分野によっては二段階システムに対し厳しい評価が見られる。ただ、どうやら留学生に人気があるということだけは目立つようだ。

「新しくドイツの大学に導入されたバACHEラー (BA) 課程、マスター (MA) 課程が学生の人気を集めている。すでに 11 万人の学生が 2600 ほどの履修コースに登録している。」と各州文部相会議 (KMK) の事務局は 4 月 20 日に Bonn で発表した。

これらの履修コースの新入生数は 2002 年から数えて 47% もアップした。多くの新入生は情報工学、経営学、そして学際的な学科 (語学や文化科学など) に集中した。

すでに BA 課程、MA 課程と、各 1300 ほどの履修コースがある。しかし実は 2004 年 12 月 1 日付けで正式認可されていたのはわずか 716 の履修コースだったそうだ。この新しい履修コースはどうやら留学生にとって魅力的であるらしい。新入生の 22% は外国人留学生だ。ボローニャ宣言に基づいて、ヨーロッパ圏の大学は 2010 年までにすべての履修コースを二段階のバACHEラー・マスター課程に移行する予定だ。BA、MA 課程に関してはすでに 1999/2000 年セメスターから大学統計が取られている。

KMK によると、それでも従来の履修コースであるディプロム (Diplom)、マギスター (Magiatser) や国家試験課程を目指す新入生数と比べて、まだ BA、MA 課程の新入生は少ないそうだ。しかしそうは言っても学生は在学中に BA 課程に変更することも可能だ。通常 6 セメスターかかる BA 課程は最初の職業資格付の学位である。

各州によって新入生の (BA・MA 課程選択の) 割合に大きな相違が見られる。2003 年、Bremen 州 (18%)、Mechlenburg-Vorpommern 州 (16%)、NRW 州 (15%)、そして Brandenburg 州 (14%) で最も多くの新入生が BA・MA 課程を選択した。最も低いのは 2.2% の Rheiland-Pfalz 州だった。

学生全体でみた場合の (BA、MA 課程選択の割合) の差はそれほど開いてはいなかった：最高率を示した州は Mecklenburg-Vorpommern 州、Brandenburg 州 (各 11%)、と Schleswig Holstein 州 (7, 7%)。最低数値は同じく 2% で Rheiland-Pfalz 州だった。新しい履修コースで学ぶ学生が最も多い州は特に総体的学生数が少ない州が多かった。

「この割合の場合、それぞれの履修コースの移行が学生に与える影響の重みが増す」と、KMK は語る。

BA 課程で最も人気の高い学科は情報工学、経営学、学際的な学科 (語学や文化科学など)。MA 課程では多くの学生が電子工学・機械エレクトロニクス、国際経営学・マネジメント、機械工学を専攻した。

KMK によるとこれらの履修コースの 2003 年度の卒業生数は制度の導入間もないということもあり 5500 人と少ないままではあったが、2002 年度の 3100 人に比べて 75% も増えている。全卒業試験合格者の中では 2.5% を占める。BA・MA 課程卒業生数では MA 課程卒業生数の割合が 55% を占め若干多いが、2001 年時の 82% よりも減少している。

これに関しても州間の差が目立つ：Rheiland-Pfalz 州 (96%)、Bremen (92%)、Hamburg 州 (83%) では新しい履修コース卒業生の殆どは MA 課程。逆に Thueringen 州

(90%)、Mechlenburg-Vorpommern 州 (89%)、Brandenburg 州 (70%) では BA 課程の卒業生の方が多かった。それらの理由として KMK は Rheinland-Pfalz 州では BA 課程より MA 課程の方が圧倒的に多いこと、Bremen 州と Hamburg 州では国際性をめざす MA 課程が多く、さらに留学生の数も多いことが影響したのでは、と見ている。

州の大学卒業生中、MA・BA 課程卒業生の割合が 2003 年最も高かったのは Brandenburg 州の 8%で、最も低かったのが Saarland 州の 0.8%だった。特に目立つのは、全履修コースの 52%を含める男子学生数が、MA・BA 課程では 62%という高割合を示していることだ、と KMK。特に MA 課程では 69%が男性で、男性のテリトリーのような。

TU 9：移行は“エンジニア教育にとって致命的”

一方、わずか 3 年間しか学ばない BA 卒業生のクオリティーについて強い疑問が新たに投げかけられている。

Diplom コースの BA・MA 課程への移行により、ドイツのエンジニア不足に拍車がかかる可能性がある、と工科大学の利益代表である“TU 9”が警告した。“TU 9”は 4 月 20 日 Karlsruhe で NRW 州政府のある公布について指摘した。その公布には現存する教育キャパシティの合格利用基準値が指定されている：大学は 80%を BA 課程、20%を MA 課程に注ぐべし。「この割合はドイツでのエンジニア不足を劇的に深刻化させ、皆伐状態を招く。」と、“TU 9”の代弁者で Karlsruhe 大学学長の Horst Hipper 氏。

エンジニア工学卒業者の数は 4 分の 1 は減るだろうと彼は危惧する。“TU 9”にとっては 5 年の学業期間の MA 課程のみが今までの大学 Diploma と同格の学位になる。BA 課程は基礎を教えるだけ：「たった 3 年間の学業ではエンジニアとして革新的、クリエイティブに働けない」と Hipper 氏。Duesseldorf でされた指定通りになれば、それは「エンジニア教育にとって致命傷」を意味する、と。TU 9 の同盟は Aachen, Berlin, Braunschweig, Darmstadt, Dresden, Hannover, Karlsruhe, Muenchen, Stuttgart の工科大学が連携している。

心理学：バACHEラー課程卒業生では助手レベル

心理学者職業連盟 (BDP) の評価ではドイツの大学の BA 課程卒業生は助手以上の仕事には使えないとのこと。今までの Diplom 卒業生とは比べられない、と BDP 会長 Carola Bruecher-Albers 氏は 4 月 16 日に Frankfurt で dpa に語った。BA 課程は心理科学の助手の育成の準備段階として見ることはできるそう。Bruecher-Albers 氏によれば、Diplom 卒業生の平均在学期間は約 11 セメスター。これまでの Diplom は新しい MA 課程とは同格になる。BA 課程の 3 年間では十分な知識を得、学問の熟考を目指すための時間がない。

【補足】：ドイツの大学で 4 分の 1 の学習課程はすでに 2 段階制のバACHEラー (BA) とマスター (MA) 課程制度に変更されているという。今セメスターでは 2900 以上の学習課程が提供されることになる、と連邦教育研究大臣 Edelgard Bulmahn 氏 (SPD) は 2 月 11 日 Kiel で催されたナショナル“ボローニャ報告 2004 年”で発表している。“ボローニャ報告 2004 年”は 2005 年 5 月 19・20 日に Bergen (ノルウェー) で開かれるボローニャ会議の準備のために行われたものである。

欧州 40 カ国が同意したボローニャ宣言の基本的な目標の中には、国際的に通用する共通学位システム、そして 2 段階制の学習過程の導入、さらに可能な限りの学生の流動性の振興がある。

連邦全土で約 10%の大学新生が MA か BA の学習課程を選択しているが、従来の学習課程から BA・MA 課程への変更進行状況は大学によってずいぶんと異なっているようだ。Bochum の Ruhr 大学では既にすべての科目が新しい 2 段階制の学習課程で学べることができるそうだ。特に自然科学の分野ではそれ特有の国際的ネットワークのせいもあって学習課程の変更がほかの分野よりも早く進んでいて、ドイツでの欧州枠大学改革は大きく進んでいると Bulmahn 氏は説明するのだが、果たしてどうだろうか。TU9 の工科大学同盟の動きを見ると本当にしつこく変更している様子だ。

Schlewsig-Holstein 州教育大臣 Ute Erdsiek-Rave 氏 (SPD) : 「ボローニャ宣言の目標は州単位で見ても大きなヨーロッパのプロセスだ」

各州文部相会議の副会長 Erdsiek-Rave 氏 : 「MA・BA 課程はドイツの大学の更なる国際化への大きな力なのだ。その上それらは大学体制の根本からの改革を可能にする」と述べている。この新しい学習課程について学生と雇用者から良い反響があったことも二人は指摘した。

Erdsiek-Rave 氏 : 「この新しい学習課程が認められるために協力してくれる心強いパートナーがいる」と。主に大企業だそうだ。「中小企業はまだ説得しなければならない。」

◎ 2002 年から 850 のジュニアプロフェッサー (Juniorprofessor) 職採用

dpa, Nr.16/2005, 18. April, 2005

○ドイツの大学では伝統的に、ハビリタツィオン (大学教授資格試験) に合格し大学教授資格を取得した正教授を中心に教員組織が構成されてきた。しかし、1997 年の大学大綱法改正により、教授の任命条件が緩和され、教授資格を取得していなくても、それと同等の学術的業績をもつ者への任用の道を開いた。それによって、2002 年新たに設けられたのが、ジュニア・プロフェッサー (Juniorprofessor) 制度である。ジュニア・プロフェッサーは、教育と研究については教授と同等の権限をもつが、学部長や学長に選出される資格はない。連邦政府はハビリタツィオン (大学教授資格試験) を長期的には廃止しようとするこのジュニア・プロフェッサー制度を導入したが、全国的なジュニア・プロフェッサー制度の導入は基本法に反するとして連邦憲法裁判所の違憲判決が出ていることは過去のぼんぼん時計で紹介したとおりである。このジュニア・プロフェッサー制度に関する連邦教育研究大臣の発表を報告する。

「2004 年末までに約 850 のジュニアプロフェッサー職が採用され、すでに 786 人の職が実際に雇用されている」と連邦教育研究大臣 Edelgard Bulmahn 氏 (SPD) は 4 月 10 日 Berlin で説明した。政府はこれらのプロフェッサーをこれまで総予算 5750 万ユーロ (約 78 億円) で奨励してきている。

4 分の 1 以上が女性の雇用であったことを Bulmahn 氏は喜ばしい結果として表した。さらにこの新しいポストは外国からの研究者をも呼び寄せている。55 ほどの職は外国からのプロフェッサーだが、その内の 40 人ほどは海外から戻ってきたドイツ人研究者だ。Bulmahn 氏はこれを科学者流出対策の成果として評価している。

「外国から戻ってきた学者数が 50 人にも満たないのは残念だが、予想通りでもある」、「アングロサクソン系の大学の方が魅力的な申し出を出す。」と、CDU・CSU 連邦議会党派の教育政策代弁者 Katherina Reiche 氏 (CDU) は懐疑的な発言をする。

注：ドイツのジュニアプロフェッサーは 6 年の任期 (3 年時限の契約採用で、研究成果を挙げ延長した場合、最長 6 年間)。

コラム：「文化としての大学」（試論その 3：神からの召命としての職業と大学）

前号では「文化としての大学」をアジールと大学との関係から考察した。そこでは、「大学」がもともと都市空間--世俗世界や権力からのアジール（世俗の世界から縁の切れた聖域、自由で平和な領域）空間、生活世界と分離したアジールの空間として、西洋で生まれた特有の文化システムであったことを中心に述べた。

教師と学生のギルド（同業者組合）、世俗世界や権力からのアジールとしての大学が大きく変貌するのは、それが職業的資格と結びついたときなのではないだろうか。

伝統的で典型的な西洋の総合大学は神学、医学、法学、そして哲学の 4 学部構成を必ずもっている。もともと教師と学生の哲学的なギルドに、都市的な職業に結びつく神学、医学、法学が加わって、総合大学ができていく。

都市とは依存的空間である。食糧や薬草等の命の糧を自力で調達できないし、全ては金銭で購入しなければ生きていけない。都市は貧しき者、病気を自力で癒せない者、金銭なき社会的弱者を拡大生産する。神学、医学、法学による職業（聖職者、医師、法曹家）は元々都市に住み苦しんでいる弱き者のために、「苦しんでいる人に（私があなたに与えた）その才能を使いませんか」という神からの召命に応じた者による神との契約によって成立した職業である。だから、これらの職業人に支払われる伝統的な「オナラリア（honorarium, -ria：名誉の謝礼）」とは強制ではない。払えるだけ、こころざしそのまま、持てるものが出せる範囲のお礼をするもので、謝礼を払えない貧しき者は感謝の気持ちだけで支払う真似をするだけでも良かったのである。この 3 学部は西洋キリスト教、都市文化なしには成り立たなかったものである。だからこそ大学は西洋で生まれた特有の文化システムだと言えるのである。しかし、やがて、これらの職業が社会や国家の有資格者のものとなり、社会や国家の管理下に置かれることによって、苦しむ弱き者のために神に召命される職業はなくなった。全てが金銭のための職業になり、今やこの 3 学部の職業人ほど真の意味での倫理を失い、金銭的豊かさ、地位、名誉と権力を享受しようとする者はいないのではないか。嘆かわしい限りである。

3. ボン研究連絡センターの活動

◎来訪&訪問、会議出席等

【4 月】

- 4 月 1 日（金） 清水研修員、足立研修員来独
- 4 月 8 日（金） ドイツ日本学術振興会研究者同窓会幹部ミーティング。
ドイツ日本学術振興会研究者同窓会・ボン研究連絡センター合同ミーティング。
マールブルク大学・教授 Dr. Heinrich Menkhaus 氏、ケルン大学・教授・Dr. Ingrid Fritsch
樋口、Schulze 職員が、フンボルト財団フェオドア・リューネンプログラム、JSPS、NSC フェローシッププログラム同窓生、新規採用者への海外派遣オリエンテーション出席
- 4 月 9 日（土） 田中センター長、一時帰国（～15 日）
- 4 月 14 日（木） 田中センター長が、海外研究連絡センター・センター長会議出席（於学振本部）

- 4 月 19 日 (火) 樋口、Schulze 職員が、DAAD 主催「オーストラリア、ニュージーランド、日本、カナダ、韓国での留学・研究の可能性」シンポジウム参加（樋口が学振プログラム紹介）
- 4 月 20 日 (水) 田中センター長、Ganter 職員、清水研修員、足立研修員が、フンボルト財団主催フンボルトフェローの集い・レセプションに参加
- 4 月 21 日 (木) 田中センター長がフンボルト財団元事務局長 Dr. Heinrich Pfeiffer、副事務局長 Dr. Gisela Janetzke と会談
学振・木曾理事、国際事業部研究協力第一課・加藤課長、同大萱係員来訪
本センター主催第 10 回日独シンポジウム講演者打合せ会
- 4 月 22 日 (金) 本センター主催第 10 回日独シンポジウム開催（～23 日）（於ボン）
木曾理事が DFG 訪問、Dr. Michael Meier, Director, Division of International Cooperation 及び Dr. Gernot Gad, Director, International Cooperation Japan, South and Southeast Asia と会談
- 4 月 23 日 (土) ドイツ日本学術振興会研究者同窓会年次総会（於ボン）
欧州日本学術振興会研究者同窓会第 1 回会合
- 4 月 28 日 (木) 在デュッセルドルフ日本総領事館・国方俊男総領事来訪
[対応：田中センター長、樋口]
田中センター長、樋口、Ganter 職員、清水研修員、足立研修員が、DFG 主催のザイボルト賞（※）授賞式参加
※元 DFG 会長 Prof. Seibold が 1994 年旭硝子財団の第 3 回ブループラネット賞を受賞し、その基金を基に、DFG が 2 年に 1 度、日独交流に貢献した著名研究者（日独 1 名ずつ）に与える賞：各 1 万ユーロ（約 135 万円）の副賞
（本年度は受賞者 2 名：岩淵達治（学習院大学名誉教授-ドイツ文学・演出家、ブレヒト研究の第一人者）及び Prof. Dr. Josef Kreiner（ボン大学日本文化研究所長、元ドイツ-日本研究所長、民俗学者、奄美・沖縄・アイヌ研究の第一人者）

【5 月】

- 5 月 2 日 (月) Antonia Petra Dhein（AvH 広報担当）と会合
（学振事業広報に関する今後の可能性の協議、打ち合わせ）
[対応：樋口、Ganter 職員]
- 5 月 26 日 (水) 樋口が一時帰国（～28 日）、海外研究連絡センター事務官会議出席（於学振本部）
- 5 月 27 日 (木) 樋口が東京開催日独学術シンポジウム会場下見・打合せ（於国立オリンピック記念青少年総合センター及び HANEZAWA GARDEN）

【6 月】

- 6 月 2 日 (月) 在独日本大使館科学技術担当一等書記官・谷広太氏来訪
[対応：樋口]
樋口、Ganter 職員、清水研修員、足立研修員が、DFG 主催化学会若手研究者日本派遣プログラム報告会レセプション出席
- 6 月 3 日 (火) 樋口、Ganter 職員、清水研修員、足立研修員が、DFG 主催化学会若手研究者日本派遣プログラム報告会出席

ボン研究連絡センター主催「2005 年 JSPS サマープログラム」プレオレーション開催

- 6 月 6 日 (月) ドイツ日本学術振興会研究者同窓会会長マールブルク大学・教授 Dr. Heinrich Menkhaus 氏との協議
[対応：樋口、Ganter 職員、Schulze 職員]
- 6 月 13 日 (月) 樋口、Ganter 職員がボン日独協会会長 Marianne Monch 外国人勲章受賞記念祝賀レセプション出席
- 6 月 14 日 (火) 樋口、Ganter 職員、清水研修員、足立研修員がボン大学主催卒業記念イベント「卒業・・・そしてさらに？研究、海外留学、・・・あるいはその両方」に参加 (樋口が学振プログラム紹介)
- 6 月 17 日 (金) ドイツ日本学術振興会研究者同窓会幹部ミーティング。マールブルク大学・教授 Dr. Heinrich Menkhaus 氏、ケルン大学・教授・Dr. Ingrid Fritsch、コンスタンツ大学・教授・Dr. Andreas Marx 氏、
- 6 月 21 日 (火) 在独日本大使館一等書記官・氷見谷直紀氏来訪 [対応：樋口]
田中センター長がフンボルト財団副事務局長 Dr. Gisela Janetzke と会談
田中センター長、フンボルト財団の JSPS Postdoctoral Fellowship 選考会に出席 (於ボン)。
- 6 月 30 日 (木) 田中センター長、フンボルト財団の年次総会※に出席 (於ベルリン) (～7 月 1 日)
※毎年、年次総会 (連邦政府大統領歓迎レセプション) で「フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞」が授与される。同賞は毎年日独の文化・社会相互理解に貢献した日本人研究者に与えられる賞 (5 万ユーロ (約 665 万円) の副賞と 1 年間のドイツ招待)。
本年度の受賞者は鏑田武志 (つばたたくし) (東京医科歯科大学大学院疾患生命科学部研究部長) 教授

◎第10回日独シンポジウム「日独学術協力の展望」－ ドイツ同窓会10周年記念開催 (－ The 10th Japanese-German Symposium “Prospects of Japanese-German Scientific Cooperation” -- 10th anniversary of the German JSPS-Club –)

本シンポジウムは、ボン研究連絡センターが「ドイツ日本学術振興会研究者同窓会」との共催により、日独双方の先端研究を紹介し、相互理解を深め共同研究の促進をはかるため、例年ドイツ国内で実施しているものである。本年度は、去る4月22日、23日の2日間にわたり、ボン市のブリストル・ホテル内会議場にて開催された。

今回は特に「学振同窓会」設立10周年を祝う記念行事を兼ね、特定テーマに限定せず、「日独学術協力の展望」を主題に、自然科学、人文・社会科学から6分野を取り上げた。学振のプログラムによって共同研究を経験したドイツ人研究者及び日本人研究者がそれぞれ組 (カップル) となって分野毎に講演を行い、シンポジウムの第一日目に自然科学分野の3組が、第二日目に人文・社会科学分野の3組が、各分野の先端研究の現状、共同研究で得られた成果と将来の展望、更に共同研究の発展を促す提言等を発表した。第一日目の講演に先立ち、在ドイツ日本国大使館の水谷章公使、ボン大学副学長の Prof.

Dr. Wolfgang Hess、フンボルト財団の Dr. Georg B. Schutte 事務総長、そして本会を代表して木曾功理事が挨拶し、ドイツ同窓会設立 10 周年の祝辞とともに、日独理解の架け橋となる同窓会への期待及び本シンポジウムを通しての日独学術交流強化への期待が述べられた。

引き続き、同窓会会長を務めるマールブルク大学 Prof. Dr. Heinrich Menkhaus が「ドイツ同窓会の歴史」について講演を行った。新井栄一 2 代目センター長と初代同窓会会長 Prof. Dr. Uwe Czarnetzki の尽力により、フンボルト財団同窓会をモデルとして同窓会の立ち上げを行った「そのとき歴史が動いた」瞬間から、同窓会 10 年の歩みを振り返り、今年がボン研究連絡センターの 2 名（田中靖郎センター長及び Sabine Ganter-Richter 職員）の在任 10 周年でもあることが紹介された。

その後、バイオテクノロジー分野で、ボッフム大学 Prof. Dr. Matthias Rögner 及び産業技術総合研究所 セルエンジニアリング研究部門・細胞情報工学研究グループ・主任研究員・三宅正人 先生の組が、「太陽光を用いたバイオ水素の生産：クリーンエネルギーの収穫を自然界のシステムから学ぶ（仮訳）（Biohydrogen Production with the Sun: Learning from Natural Systems to Harvest “Clean” Energy）」の共同研究の成果を発表し、議長をベルリン工科大学 Prof. Dr. Helmut Görisch が務めた。

次に物理化学の分野で、マックスプランク鉄鋼研究所 Dr. Achim Walter Hassel 及び北海道大学大学院工学研究科・工学部・瀬尾眞浩 先生の組が、“腐食工学：Corrosion Engineering”の共同研究成果をそれぞれ「“Real Time Monitoring of Repassivation to Study the Elementary Steps after Mechanically Induced Depassivation”及び“Mechanical and Chemical Interactions of Passive Metal Surfaces Evaluated by Nano-indentation or Nano-scratching in Aqueous Solution”のタイトルで発表し、議長をコンスタンツ大学 Prof. Dr. Andreas Marx が務めた。

続いて、物理分野で、ボッフム大学 Prof. Dr. Werner Meyer 及び中部大学工学部・堀川直顕 先生が双方の具体的な共同研究分担の実例を通して、共同研究の主題となっている素粒子、とりわけ「スピン」及び「スピン」を使った物理学研究を中心に、70年代初めのボン大学-名古屋大学の初期の協力からこれまでの当該分野での日独協力の歴史と成果を発表し、議長をボッフム大学 Prof. Dr. Uwe Czarnetzki が務めた。

第一日目のプログラム終了後に参加者全員によるビュッフェ形式の夕食会が同ホテルで催され、ボン研究連絡センター・田中靖郎センター長の挨拶に続き、元フンボルト財団事務総長 Dr. Heinrich Pfeiffer が挨拶を行い、日独交流のさらなる発展を祈念して乾杯の音頭を取った。日本のやや古い懐かしい音楽をバックミュージックに多くのテーブルでなごやかな懇談が続いた。夕食会后、同窓会主催で行ったダンス・タイムも盛況で深夜まで熱いダンスが続いた。

シンポジウム第二日目は、講演に先立ち、ボン研究連絡センターの樋口が学振の新規事業の概要について説明を行った。

講演はまず、比較国際教育分野で、国際教育研究所 Dr. Botho von Kopp 及び立命館大学 大学教育開発・支援センター・江原武一 先生 が「グローバル化及び自由化というコンテキストでの大学の国際化（仮訳）（Internationalization of University in the Context of Globalization and Liberalization）」を中心として、日独高等教育の国際比較の共同研究の成果を発表し、議長はケルン大学 Prof. Dr. Walther Dreher が務めた。

続いて、法学分野で、ミュンヘン大学 Prof. Dr. Gerhard Ries 及び九州大学法学研究院・法学部・五十君麻里子 先生がミュンヘン大学と九州大学の20年間にわたる協力を紹介し、「法の受容と摩擦（仮訳）（Reception of Law and Frictions）」に関する日独共同研

究の成果と展望を発表し、議長は マールブルク大学**Prof. Dr. Heinrich Menkhaus**が務めた。

最後の講演として、心理学分野で、アイヒスタット大学**Prof. Dr. Jürgen Hellbrück**及び大阪大学大学院人間科学研究科・桑野園子 先生が「心理学的音響学：人間環境の音 (仮訳) (Psychological Acoustics: Sound in Human Environment)」をテーマに、騒音・音が認識能力や環境にもたらす影響の研究についてその成果と展望を比較的に発表し、議長はオーデンプルグ大学 **Prof. Dr. August Schick**が務めた。

2 日目終了後、カルチュラル・プログラムとしてドイツ連邦共和国美術展示館でのツタンカーメン展見学を行った。

会場には同窓会の会員をはじめ、地元ボン市やドイツ各地から参加した研究者、AvH、DFG、DAAD などドイツ対応機関関係者など計約 260 名が参加し、各分野の日独共同研究の歴史的展開や展望、分りやすく高度な内容の講演を熱心に聞き入り、鋭い質疑応答が交わされた。

学術領域の専門細分化が加速する昨今、幅広く 6 分野を取り上げ、2 日間にわたって行われた本シンポジウムでは、日独双方の研究者の組による共同研究発表に対する聴衆の反応は非常に良好で、講演内容そのもののレベルの高さ、興味深さとともに、日独共同研究の具体的発展例を歴史的に展望することの意義を高く評価し、賞賛する声が相次ぎ、成功裡のうちに幕を閉じた。また、プレスの反応も非常に良く、講演者や同窓会役員に対する当日インタビューだけでも、雑誌 (Deutsche Presseagentur, dpa)、ラジオ ("Deutschlandfunk, Campus und Karriere"及び"Deutschlandfunk, Forschung aktuell")、新聞 ("Generalanzeiger Bonn") の 4 件を数え、その他にも他のジャーナリストから資料請求が数件きており、本シンポジウムへの関心の高さを示すものとなった。

◎ドイツ同窓会年次総会開催

第10回日独シンポジウム「日独学術協力の展望」の開催に併せ、4月23日にドイツ同窓会年次総会を開催した。

参加者は同窓会正会員 (会費を支払っている正規会員) 等合計35名 (うちゲスト6名)。年次総会では、年間活動報告と今後の活動計画が中心議題である。その中で特に、ボン研究連絡センターと同窓会の共催で開催する来年度シンポジウムについては、ドイツ同窓会 (ドイツ研究者側) がどのようなテーマ、要望をもっているのか関心のあったところであったが、以下のように検討し、今後、同窓会幹部と学振側とで協議の上、決定していくこととなった。

○来年度シンポジウムについて (案)

①日時：2006年5月19日-20日 (予定)

②開催場所：北ドイツ※

案1 Lubeck、案2 Bremen、案3 Osnabruck

・これまで10回のシンポジウムを北ドイツで開催したことがなく、初めての北ドイツ開催はすぐ合意した。ブレーメンは科学に力を入れている都市であると聞く。

③トピック (仮名) ※：

案1 Cancer and Life (トピックは幅広い角度からガンや病気を取り上げる。)

案2 Natural Disaster / Disaster Prevention (トピックは地震、津波、洪水等)

案3 Transportation and traffic

- ・ この他にも環境やロボティクス分野の関心も高かったが、それぞれドイツ同窓会が日本におけるドイツ年記念で日独学術シンポジウム、ボン研究連絡センターがコロキウムテーマとして取り上げる予定だったため、対象外となった。

④その他

・ 様々な分野の研究者が様々なアプローチで議論に参加できるよう、幅広いトピックを取り上げたいという意見が強く、また、今回のシンポジウムで共同研究の成果発表（日独の研究者が組になって発表）が好評だったため、来年度は日独3名ずつの講演者のうち、トップクラスのキーノートスピーチ2名ずつに加え、日独1名ずつ（1組）は共同研究の成果発表とすることとした。

注※：現在、開催場所はブレーメンで、テーマについてはガンだけでなく、社会的影響の大きいさまざまな病気を取り上げる方向で検討中。

◎JSPS 欧州同窓会幹部会合開催

同じく、第10回日独シンポジウム「日独学術協力の展望」の開催に併せ、4月23日に第1回欧州同窓会幹部会合を開催した

参加者は英国同窓会幹部2名、スウェーデン同窓会幹部1名、フランス同窓会幹部1名、ドイツ同窓会幹部4名、オブザーバーとしてボン研究連絡センター事務局2名の合計10名である。欧州の同窓会幹部が一同に会する初めての会合であったため、各同窓会の活動状況紹介が中心となった。その他に、かつてあったSTA fellowsのネットワーク、かつて日本内にあったヨーロッパ協力ネットワークやEU/JSPSポスドクフェローシップがなぜなくなってしまったのかということが話題になった。いずれも担当者が変わって、あるいは予算がなくなって、消滅した模様。ネットワークは一度消滅したらもう元には戻らない。同様に国際交流・協力、同窓会のようなネットワークは核となる担当者の継続性、予算・組織的継続性の重要性を痛感する。

また、今後、以下のことを実施し、欧州内同窓会の協力関係を築いていくことを合意した。

○今後の協力について

- ①互いのイベント情報を交換すること。
- ②互いのニュースレターを交換すること。
- ③互いのホームページにリンクすること。
- ④年に一回、意見交換の場として会合をもつこと。

（互いの海外センター・シンポジウム時期に合わせて、場所は順番に持ち回りで、年に一回欧州同窓会幹部会合を開催。来年度は夏に英国で開催予定。）

【雑感】：ドイツ同窓会は今年 10 周年を迎えた。だが、学振同窓会自体はまだまだよちよち歩きの赤児であり、やっと火がついたばかりの火種で、大事に火を育てないとすぐに火は消えてしまう。その意味でも、ドイツ同窓会 10 周年のこの機会に第 1 回の欧州同窓会幹部会合を開催できたのは実に喜ばしい。

フンボルト財団は毎年世界中から 1800 人ほどの研究者をドイツに招待する。そのケアの手厚さは有名だ。そして、世界 130 か国に 23000 人の Humboldtian（元フンボルト・フェロー）のネットワークがあり、それを支えるのが 60 か国約 100 団体ある元フェロー同窓会（フンボルト協会）だ。日本にも東西 2 つのフンボルト協会がある。

6 月初旬にハンガリー大統領に就任した Laszlo Solyom 氏も元フンボルト・フェロー（1981、1984、1988 年）であり、フンボルト研究賞受賞者（1999 年）の憲法学者である。フンボルト財団はこのような元フンボルト・フェローの各国情報をきちんと把握して広報し、この他にも例えば元フンボルト・フェローのノーベル賞受賞者は 35 人と公表する。

今年ボンで開催したシンポジウムの日本人講師でやはり元フンボルト・フェローの方が当時の事務局長 Pfeifer 氏が 20 年以上お話したこともなかったのに、その方と当時のドイツ人受入れ教授の名前をしっかりと覚えておられ、当時の話をされたので驚いたようだ。逆に今でも多くの日本人元フンボルト・フェローの先生方が受入れ研究者だけでなく、フンボルト財団事務局長や事務担当者を友人として記憶している。

同窓会は息の長い地道な活動だ。それを支えるのは同窓会メンバー自身の、その国での「良かった」という体験であり、その国とその国の友人が「好き」という単純明快な感情なのだろう。

◎JSPS サマープログラム・プレオリエンテーション開催

本プレオリエンテーションは、6 月 14 日から 2 か月間日本で開始される JSPS サマープログラムの参加者を対象に、ボン研究連絡センターが「ドイツ日本学術振興会研究者同窓会」との共催により、初めて企画・実施したものである。去る 6 月 3 日に、ボン市内の Gustav-Stresemann-Institut 内会議場にて開催した。

参加者は、今年度参加者 4 名（今年度参加者は全員で 7 名、そのうち 3 名は米国、英国在住のため、ドイツ在住者 4 名が全員参加）、昨年度参加者 9 名、その他に、DAAD 担当者 2 名、ドイツ学振同窓会 Prof. Dr. Heinrich Menkhaus 会長及び同窓会メンバー 1 名、さらに同日 DFG 内で帰国報告会を行っていた DFG の化学会若手研究者日本派遣プログラム参加者 3 名が合流した。

まず田中センター長の開会挨拶に続き、参加者全員が自己紹介を行った。それに続き、第一部で樋口からサマープログラム（プログラム紹介とスケジュール）を中心とする JSPS の国際事業を説明。DAAD の Dr. Karin Moller が日独交流のプログラムを中心に DAAD のプログラムを紹介した。

コーヒープレイクの後、第二部を開始。2004 年参加者 2 名（Dr. Marcus Rohnke, Giessen 大学：東北大学滞在及び Ms. Birgit Pils, Wurzburg 大学：京都大学滞在）から昨年の経験を講演してもらい、続いて、帰国後のネットワークづくりのため、同窓会会長 Prof. Dr. Heinrich Menkhaus から同窓会の紹介を行った。最後に Q&A セッションを行い、日本の生活・研究について議論を行った。

昨年度参加者 2 名は、Dr. Marcus Rohnke が男性で東北地区、物理化学分野専攻、Ms. Birgit Pils が女性で関西地区、バイオ分野専攻で、それぞれの違う経験をパワーポイントを使ったプレゼンテーションで、写真をふんだんにちりばめ、素晴らしく講演してくれた。

Dr. Marcus Rohnke はドイツ側指導教授と協力して、日本側受入研究者と連絡を取り、今年 7 月に日本から 20 名ほどの PhD 学生、ポスドクを招き（学生、ポスドクが研究発表）、ワークショップを開催することになったという日独協力の大きな発展を示す嬉しい報告もあった。（日本側学生の派遣費用は 21 世紀 COE のプロジェクト負担）

また、Ms. Birgit Pils もサマープログラム終了後、今年 4 月にすでに日本再来日をはたすなど、プログラム終了後もそれぞれの参加者が日独協力を進展させている報告があった。

日本での研究体験、学術的な成果や協力ももちろん素晴らしかったが、2 人とも日本での生活体験、特にホームステイの楽しかった経験や週末の旅行、夏祭りなどの楽しかった体験を非常に印象深く語ってくれた。

この 2 名だけでなく、昨年の参加者がサマープログラム終了後も日本側受入研究者や学生、またホームステイ先の家族と今も連絡を取り合っている様子が顕著に見られ、印象的であった。サマープログラムが確実に成果を挙げている証拠であると言ってよいだろう。

今年度参加者からは経験談を聞くととても良い機会であり、日本に行くモチベーションが高まったこと、事前に参加者と知り合う大変良い機会だったことなど高い評価と感謝の声を得た。また、昨年度参加者からも自分の経験を伝えることができることの喜びや昨年の参加者が集うことができ非常に良い機会だったとの感謝の声を聞くことができ、全体として非常に高い評価と良い反応であった。

本プレオリエンテーションはボン研究連絡センターとしての初めての企画であったが、今後も継続して実施していきたいと思っている。

◎DFG 主催・化学会若手研究者日本派遣プログラム報告セミナー出席

2005 年 6 月 2 日（木）、3 日、ドイツ研究協会（DFG）が主催した、化学学会若手研究者日本派遣プログラムの報告セミナー「8 週間の日本、そしてそれから？（8 Wochen Japan und dann?）」に出席した。

このプログラムの派遣前オリエンテーションが 3 月 7 日に開催された際にも、招待を受け、学振プログラムの紹介を行っていたため、参加者とは 3 か月ぶりの再会となった。このプログラムは、今年から開始されることになったドイツ化学学会若手研究者の日本派遣プログラムであるが、いわば、学振サマープログラムの二国間・化学版であり、プレドク・ポスドクを対象に 2 か月間の日本滞在で日本を経験してもらおうという企画であった。

当日はこのプログラムで日本に派遣された材料化学・工学、バイオ化学など化学分野の若手研究者 10 名全員（うち女性 2 名）がドレスデン、ベルリン、ステュットガルトなど各地からこの 2 日間にわたる報告会に泊まりがけで参加した。

8 週間のプログラムで、一行はまず 3 月 26-28 日に神奈川大学で開催された第 85 回日本化学会の「日本におけるドイツ年」記念特別行事に参加した。ここでは本会古川佑子国際事業部長（当時）やアーヘン工科大学奥田淳教授の記念講演、ドイツ化学学会のドイツ人研究者 10 人の講演とともに、本プログラム参加者 10 名がポスタープレゼンテーションを行っている。この記念行事の参加後、各参加者は合計 8 週間にわたって各受入研究者の機関で共同研究を行った。

10 人の参加者が日本滞在経験について幅広く研究室・生活・観光などの写真を紹介しながらプレゼンテーションを行った。わずか 2 か月の日本滞在であっても、どの参加者も研究面はもちろん、日本の文化・歴史・自然・生活に触れ、非常に印象深い良い体験をしてきた様子がうかがわれた。女性 2 名が浴衣姿で現れたのは驚きであったが、それほど日本に好印象をもったことがわかる。また、研究室や生活の日独比較などの感想は大変興味深いものだった。

わずかに研究環境で困った点としては、日本では研究装置の管理責任者が不在であること、薬品・装置の安全面の配慮の不十分さ、研究組織体制が上下階層的であること、マスター学生との英語コミュニケーションの苦勞などである。ポスドクレベルになれば国際経験を積んで英語

でのコミュニケーションにも熟練してくるのだろうが、日本のマスター学生ではその経験がどうしても不足するというところだろう。

この報告会は DFG が「8 週間の日本、そしてそれから? (8 Wochen Japan und dann?)」というタイトルをつけているように、DFG のポストドク支援プログラムなど参加者の今後のキャリアパス構築にも配慮されていると同時に、日独ネットワークの構築にも配慮し、本会ドイツ同窓会の紹介の時間をさいてくれた。ドイツ同窓会メンバーで化学分野の研究者である Prof. Dr. Czarnetzki (Ruhr Universität、元ドイツ JSPS 同窓会会長) 及び Prof. Hassel (MPI-Dusseldorf、本年ボン開催シンポジウム講師) が招待され、参加してくれた。

今年初めて JSPS サマープログラムの出発前プレオリエンテーションを実施し、昨年の JSPS サマープログラム参加者にその体験をこれから出発する参加者に話してもらう機会を設けたが、昨年の JSPS サマープログラム参加者もこの DFG のプログラム参加者も、非常に大きな成果と体験をわずか 2 か月間で得ているのは実に印象深い。2 か月は短い。しかし、その国で暮らしてみてもどんな国か直感的につかむには良い長さなのだろう。若い参加者がその体験を糧に、帰国後の次のステップにつなげ、日本との交流のさらなる成果を挙げていくことが大いに期待できそうである。

なお、DFG ではこの化学学会若手研究者日本派遣に続き、数学学会若手研究者日本派遣プログラムを本年度から実施する予定であり、その出発前オリエンテーションセミナーが 7 月 19—20 日にベルリンで予定されている。

◎その他の活動

- ・ 日本学術振興会パンフレット等の対応機関等への配布
- ・ 情報提供ホームページ” forschen-in-japan.de” の拡充作業
- ・ ドイツ語版ニューズレター (ルンド・シュライベン) 等の作成・配布
- ・ 各種情報収集提供業務
- ・ 日本学術振興会事業の広報 (資料出展、新聞広告掲載ほか)

4. 今後の予定

2005 年

- 7 月 1 日 (金) フンボルト財団の年次総会出席 (於ベルリン)
- 7 月 4 日 (月) CNRS Bonn 事務長 (Dr. Bernard Heusch) 送別レセプション出席 (於ボン)
- 7 月 6 日 (水) DFG 年次総会出席 (於ベルリン)
- 7 月 15 日 (金) 日独韓 PhD 学生ワークショップ (Solid State Ionics: Cross-Frontier Problems in Physical Chemistry and Material Science) 出席 (於ギーゼン大) (～16 日) (挨拶及び学振プログラム紹介)
(東北大学多元物質研 21 世紀 COE プロジェクトによる支援)
- 7 月 18 日 (月) DFG-JSPS 二国間共同セミナー (ブラックホールと銀河の形成と共進化) 出席 (於レーゲンスブルグ) (～22 日) (挨拶)
- 7 月 19 日 (火) DFG 主催数学会若手研究者日本派遣プログラム事前オリエンテーション出席 (於ベルリン) (～20 日) (学振プログラム紹介)

- 8 月 5 日 (金) ドイツ日本学術振興会研究者同窓会幹部ミーティング。
ドイツ日本学術振興会研究者同窓会・ボン研究連絡センター合同ミーティング。
フンボルト財団フェオドア・リューネンプログラム、JSPS、NSC フェローシッププログラム同窓生、新規採用者への海外派遣オリエンテーション出席
- 8 月 31 日 (水) JSPS ボン研究連絡センター年次報告会 (JSPS Abend) 開催 (於ボン)
- 9 月 12 日 (月) 日本におけるドイツ年/日独学術シンポジウム「Urban Planning - Sustainable Cities」開催
(ドイツ学振同窓会・学振共催、於国立オリンピック記念総合青少年センター) (～13 日)
- 9 月 15 日 (木) CNRS ボン事務所開設 25 周年記念パーティ
- 11 月 17 日 (木) Helmholtz 協会 (HGF) 年次総会出席 (於ベルリン)